ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.8 August 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言
全世界を異郷の地とするもの
／井上　昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（8）
明治 20 年 11 月の「おさしづ」
／深谷　耕治 2

・音のちから―中国古代の人と音楽（15）
出土楽器が語る音の世界―磬（けい）―
／中　純子 3

・ヴァチカン便り（63）
法王が再度入院へ
／山口　英雄 4

・天理参考館から（32）
蚊帳を吊るころ
／幡鎌　真理 5

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（26）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 6

・2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（9）
第 1 講：167「人救けたら」
／井上　昭洋 7

・おやさと研究所ニュース 8
第 357 回研究報告会「出張報告：カトマンズ」（5 月 29 日）／ 2023 年度公開教学講座のご案内／ 2022 年度「教学と現代」

巻頭言

全世界を異郷の地とするもの

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

> The man who finds his homeland sweet is still a tender beginner; he to whom every soil is as his native one is already strong; but he is perfect to whom the entire world is as a foreign land.[1]
>
> 故郷を甘美に思うものは未だひ弱な初心者だ。あらゆる土地を故郷とするものは既に力強い。だが、全世界を異郷の地とするものは完璧である［拙訳］。

人文社会科学を専攻する学生であれば、ゼミなどで（場合によっては原著で）読むことになるエドワード・サイードの名著『オリエンタリズム』の一節である。これは、12 世紀のフランスのキリスト教神秘主義者、聖ヴィクトル・フーゴーをドイツの比較文学者エーリヒ・アウエルバッハが引用したものをさらにサイードが引用した一節である。

私も院生時代に原著で読み、この一節の格好良さに痺れて、文化人類学者たる者はこうでなくてはならないと感じ入ったのを覚えている。しかし、フーゴーの本歌取りとも言えるこの引用でサイードが言いたかったことは、その後に続く以下の行にある。

> The more one is able to leave one's cultural home, the more easily is one able to judge it, and the whole world as well, with the spiritual detachment *and* generosity necessary for true vision. The more easily, too, does one assess oneself and alien cultures with the same combination of intimacy and distance.[2]
>
> 人は自分の文化的故郷から離れれば離れるだけ、真の洞察に必要とされる精神的な距離の置き方と寛容の精神とを持って、その故郷、さらには全世界についてより容易に判断することができる。また、同様に親近感と距離感を併せ持って、自分自身と異文化についてより容易に評価するのだ［拙訳］。

精神的に距離を保ち、かつ寛容性を持って世界を理解すること。同様に、離れたところに身を置きつつ親近感を持って自分自身とそれ以外の異文化を評価すること。それは文化的な故郷から離れれば離れるほどに容易になるのだとサイードは説く。全世界を異郷として受け入れるということは、そのように相反する２つの態度を両立させて対象に対峙することなのだ。

研究対象となる異文化を我が故郷とすることを理想とする文化人類学者にとって、これは非常に重要な提言である。それは文化の解釈における「アウトサイダー」と「インサイダー」の関係とも関わってくる。果たして、精神的に離れていることと親しく近づくことを同時に行うことは可能なのか。それは付かず離れずということではない。対象に対して、距離を置きつつ近づいていくこと、近づきつつ遠ざかったままでいることであり、およそ不可能なように思える。

しかし、文化人類学の方法論である参与観察について同じことが指摘されるのは、少しでもこの学問をかじったことがある人であれば、よく知っているところだ。対象に主体的に参与ししつつ客観的に観察することは論理的には不可能であり、実際のフィールドでは参与と観察のどちらに軸足を置くか、その都度バランスを取りながら調査を行うことになる。厳密な意味での参与観察が実現不可能な理念型であったとしても、対象に対峙する際に客観と主観の両方が必要とされることが分かっていることが大切だ。サイードの主張もそこにあるのだと思う。常に距離を取ることを意識しつつ寛容性と親近感を持って対象に接すること。

サイードは土地や国や文化に対してそのような態度でアプローチすることを唱える。そこには宗教も当然含まれる。さらに、学問の領域においても、同様なことが考えられるだろう。ネイティブ宗教学としての天理教学の構築を試みる時、どこにいても（自分の信仰する宗教を含め、どの宗教を研究するにしても）内なる寛容性と親近感を持ったストレンジャーであり続けることが、求められる完璧な態度なのかもしれない。

［註］

（1）Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979), p. 259.

（2）Ibid., p. 259.